

講演

『私の歯科医療観』 45年の歯科医師生活を振り返って

石井 正敏

●抄 録●

私は1965年に歯学部を卒業し、1969年に新潟市で開業した。我々が歯科医師として働いてきた時期は日本が高度成長期に入り、社会的にも大きな変化を経験してきた時代であり、歯科医学も歯科医療も進歩をとげて現在に至っている。開業以来、一人の歯科医師としてどのような考え方で患者さんの治療にあたってきたか簡単にその変遷を述べてみたい。

自分としてはその時点において、患者にとって最善と考えた治療を心掛けてきたつもりであったが、その結果が意に反した場合も少なくなかった。経験を通して若い歯科医師に伝えたいことは、患者の正確な診療記録を残しておくこと、生涯を通しての継続的な学習、そして反省的実践家であってほしいということである。

キーワード：専門家、師、歯周治療

I. プロフェSSIONナルを目指して欲しい

はじめに私の尊敬する故Dr. John Prichardが1988年に執筆したChanging concepts in periodonticsの一部を紹介したい。¹⁾

『時として十分に計画され遂行された研究結果から、誤った結論が導きだされることがある。それ故に患者を管理するにあたって、臨床研究の統計学的分析のみに立脚することはできない。臨床観察は独善的(anecdotal)といわれるが、それは歯周治療学に関するすべての科学的研究に最終判断をくだすために用いられるものである。歯科医療に求められるのは正直な自己評価である。しかし現実には多くの門外漢すなわ

ち商業的に動機づけられた人々が行政と臨床に影響を及ぼしている。(中略) 不必要な治療や利益追求の欲望があらわになるにつれ、歯科医療は健康を管理するという本来の分野を忘れ、商業市場へとその身を委ねてゆく。』

この文章のなかに現在の日本の歯科界のかかえている問題点が凝縮されている。昨年来新聞テレビ等の報道で繰り返された犯罪的なインプラント治療は極端な例かも知れないが、歯科医師の役割は、患者の自然歯列を生涯にわたって、健全な状態で機能を営むように手助けをすることであると強調したい。²⁾ そのためには患者にとって何が重要であるかを冷静に判断する能力が求められよう。新しい技術を臨床に取り入れるのに性急なあまり、インプラントが患者の歯の保存よりも優先されることは絶対にあってはならないことと思う。またインプラントの治療がさまざまな理由のため適応できない患者の方が圧倒的に多い現実を考えると、従来の伝統的な技法による可撤性義歯も、少なくとも定型的な術式をきちんと修得しておき、さまざま患者を少なくする努力も一般開業医にも求



※冬期学会講師

(いしい・まさとし)
歯科医師
新潟市開業

められると思う。そのような意味において、若い歯科医には、歯科の分野におけるプロフェッショナル (Professional) を目指して欲しい。

プロフェッショナルは、完璧を目標として、最善の努力を継続することが求められ、この努力は歯科医師を続ける限り、生涯を通して続けなければならない。近年歯周医学 (Periodontal medicine) という新しい分野が注目されるようになり、^{3, 4, 6)} 歯科は医学におけるきわめて重要な一分野であり、歯科医師は全身を理解した上で、口腔領域の専門家として、来院する患者の治療にあたらなければならないと思う。

若い歯科医には、いかさまやはったりではない、本物の臨床を優れた先輩に学び、歯科に本気で取り組んで欲しい。そうすれば厳しいといわれる歯科界を乗り切っていくことができるものと信じている。

G. V. Blackは歯科医学は生涯を通して学ぶべきものであって、歯科医師は継続的学徒であらねばならないと繰り返し述べている。

上杉鷹山公の和歌「なせば成る、なさねば成らぬ何事も成らぬは人のなさぬなりけり」を座右に生涯をかけてこの仕事に取り組んで欲しいと願っている。

II. 良き指導者 (Mentor)

私達は生まれてから死に至るまで多くの出会いを通して人生が形成されていく。そのなかの印象的な出会いはその人の生き方を左右するほどの影響を与える。なかでも良い師、指導者 (Mentor) との出会いは、本人の備えた知識、経験、感性があつて良きタイミングのもとに (邂逅の機会が) 得られるものであって、決して漫然と待っていて向うからやってくるものではない。

2008年9月のアメリカ歯周病学会の会長であつた Dr. Karabinは総会の会長挨拶で、師 (Mentor) について自身の経験をもとに語った。Mentorship (師弟の関係、あり方) とは、より経験の豊富な師匠と若くて未熟な弟子との間に築かれる将来において期待される発展的な関係のことであり、Dr. Karabinは自分の成長にとってすぐれた師と出会いがあつたために、自分の人生が方向づけられたと述べた。若い歯科医には良き師を求め、その後姿から学びとってほしい。

III. 私の開業医としての変遷

私の開業した時代は日本が高度成長期に入り社会的にも大きな変動を経てきた時代であり、歯科医学も歯科医療もかつてない変革を経験して現在に至っている。歯科医師となった当初、自分が臨床の拠り所としていたものは、Dr. Beachによる歯科治療の四大目的であり、それを基本姿勢として、治療の段階を考えつつ治療方針を立案し系統的に治療を進めることを目標としていた。

1960～1970年頃の日本の歯科臨床は欧米に比較しきわめて遅れていた。そして当時良い歯科医師とはすぐれた修復補綴治療をすることがその条件であつたように思う。この時代に近代歯科の考え方がおもに米国留学から帰国した先生方から広められ、多くの人々は彼等から学んだものである。

最初に良い修復補綴治療を指向した私の臨床は、その根幹をなす歯髓根管系や歯周組織への配慮そして予防歯科に対する認識が欠如していたことにより、これらの分野の勉強の必要性を痛感することになった。そして私の関心は、歯周病学と、歯周治療学、そして根管治療 (歯内療法) に向かった。歯周治療は国内で勉強する場が少なく、知人の紹介でアメリカ歯周病学会に入会し、学会に出席すると同時に開催地にある歯学部歯周病科や、歯周病専門医の診療室を訪れ、実際の治療を見学した。また来日する臨床家の講演や実示にはできるだけ時間をつくり参加してきた。学んだことは患者の治療に反映させてきたつもりである。自分としてはそれぞれの時点で最善を尽したが長い年月の経過をみると一部には見るも無残な状況となつてしまった症例もあつた。失敗症例を詳細に検討してみると、大部分は我々の治療努力に対してコンプライアンス (即ち患者の治療内容の理解や協力) が得られなかつたものであつたが、一部には誠実な治療努力に対してはかばかしい応答が得られなかつた症例もみられた。内外の研究論文や症例報告などを参照してみると、個体の治療に対する応答 (Host response) の問題が関与しているものと思われた。そのような要因として、喫煙、糖尿病、ストレス、女性ホルモンの生涯を通しての変動、薬剤の副作用など数多くの全身的背景を考



図1 歯周治療の変遷
Fig. 1 Changing paradigm of periodontics

えなければならないことが示唆されたのである。歯周病は口腔局所の問題としてだけではなく、全身疾患とのかかわりが少しずつ解明されつつあり、1990年代後半には、歯周医学 (Periodontal Medicine) という概念が生まれた。⁶⁾ 今後は、口腔の健康管理を十分に行うことが人々のQOLにとって重要であることを歯科から強く発信することが望まれる。

図1に、1914年にアメリカ歯周病学会が創設されてから現在までの歯周治療の変遷と歯周病のとらえ方の歴史の変遷の概略を示す。このような歴史の流れを背景として現在があることを折にふれて是非思い起してほしいと思うし、また自分が師 (指導者) と仰ぐ人物はどのような背景を有し、どの位置に立っているかを客観的に認識しておくことは重要であると思う。このことはどのような分野を勉強するにしても求められる基本的姿勢であろう。

図2は、1950年代以降の歯周病のおもに細菌学を中心として病因論の変遷を示したものである。私が教育を受けた時代は、歯周病は非特異的であり、微生物が複合して歯周感染を起こすとされ、治療法としては



図2 歯周病の病因論の変遷
Fig. 2 Changing paradigm of periodontal pathogenesis

徹底したプラーク・コントロールが強調されていた。1970年代になると歯周病の病因として特異的な細菌が発見され、数種類の歯周炎の存在が指摘されるようになった。その後個体と細菌の相互的関連 (Host-Parasite Interrelation) が着目され個体の免疫応答や危険因子が重視されるようになった。現在では糖尿病など全身

疾患との関係が注目をあびている。一方インプラントの普及にともないインプラント周囲炎の病態も課題となっている。

IV. 病例から学んだこと

講演では具体的症例を示し、時代背景とその時行なった治療の背景となった論理 (Rationale) そして直近の状態の口腔内写真とX線写真で示したが、紙幅の都合により省略したい。

V. 若い歯科医にとくに心がけてほしいこと

臨床歯科医師として活躍することを指向している方々には以下の3つを目標としていただきたい。

- (1). 患者の記録をできるだけ正確に、規格性のある資料として残すこと。
- (2). G. V. Blackの述べているように継続的な学生として生涯を通して勉強、研修を続けること。
- (3). 反省的实践家であること。反省的实践家というのは、SchonがReflective Practitionerと表現し

たもので、「自分のことが冷静に客観視でき、さらに悪い点は自助努力で変えることのできる能力をもつ、いわば「賢い」普通の大人になることといわれている。私自身、そのような歯科医師でありたいと願っている。

参考文献

- 1) Prichard, J.F. : Changing concepts in periodontics. Dental Clinics of North America Vol.32, No.2 : 387-393
- 2) Prichard, J.F., Clark, J. : Clinical Dentistry. Treatment Goals. Vol.3. Hagerstown, Maryland, Harper and Row, 1986
- 3) Grossi, S.G., et al : Treatment of periodontal disease in diabetics reduces glycated hemoglobin. J. Periodontol. 1997 ; 68 : 713-719
- 4) Glick, M. Risky liaisons : What is the relationship between oral conditions and nonoral diseases? J. Am. Dent. Assoc. 2007 ; 138 : 1056, 1058, 1060
- 5) Schon, Donald A. : The reflective Practitioner : How professionals think in action. USA : Basic Books : 374, 1984
- 6) Rose, L.F. and Mealey, B.L. : Periodontics : Elsevier Mosby, 2004

My view of dental practice 45 years review of dental life

Masatoshi ISHII, D.D.S., F.I.C.D.

I graduated dental school in 1965 and set up general dental practice in 1969 at Niigata city. At that time, Japan was socioeconomically at developing stage and experienced big change. Dental medicine as well as dental practice also made tremendous progress past 50 years.

As a practicing dentist, I made every efforts to perform and render best dental treatment for our patients since beginning of practice. We expected successful clinical results, however, even our conscientious efforts, some cases resulted in failure.

I would like to convey young dentists the following matters. (1)Keep accurate clinical records. (2)Be continual dental student throughout life. (3)Be reflective practitioner.

Key words : Professional, Mentor, Periodontology and periodontics